

### 【第43話】緊急査問委員会招集

のんびりとベッドにうつ伏せに横たわった蘭は、隣に横たわる栄を見やった。今日は何となく森林浴がしたい気分だったので、観葉植物が豊富に置かれた、リゾートホテルを思わせる造りの部屋に泊まることにした。室内にはごく微かに水の流れる音が響いている。

眠りから覚めてすぐと言うこともあり、蘭はぼんやりとした目で栄を見つめていた。そういえば栄は改造された後、引き取りに行った蘭に改造のために掛かった費用のことや、予測される維持費についてなどをつらつらと語りまくった。その時のことを思い出して蘭は微かに微笑んだ。栄の姿は陵にとってもよく似ている。正確に言えば陵が女性で成長したらこんな風になるだろうな、という容姿をしているのだ。おまけに声も陵そっくりで、そんな栄がつらつらと費用などについて言ってもついつい微笑ましく思えてしまった。

それまで眠るように目を閉じていた栄がぱちりと目を開く。横たわっていた蘭はベッドのヘッドボードにある時計に目をやった。

「……そっか。七時になっちゃったんだ」

少し残念な気分で蘭は呟いた。

「スケジュールは設定されていません」

「ん……そう……なんだよねえ」

気怠い顔で言って蘭はため息を吐いた。だがこのまま部

屋にこもってセックスに明け暮れていても仕方がない。蘭はよしよ、と声を掛けてのろのろと身を起こした。布団がずれると栄の裸が露わになる。栄は股間を弄くり回していた。

「一応、接触はしたんだよね？ 引き落としが合ったみたいだし」

陵に与えたカードで買い物をするとすぐにこちらに報せることになっている。陵が動く先々で買い物や飲食にカードを使えばすぐに判るということだ。

「はい。エンジェル・オア・リリスでのカード使用が確認されています」

「じゃあ大丈夫なのかな」

ぼんやりとした顔で頷いて蘭はベッドを降りた。それに少し遅れて栄が身を起こす。シャツを羽織って振り返った蘭は長い髪をかき上げる栄をじっと見つめた。

「ねえ。あとどのくらい時間に余裕があるかな」

「変数……不確定要素が多いので予測は難しいと思われま

す」

栄が真っ直ぐに蘭を見つめて答える。そうしている間にも蘭の股間でペニスがむくりと頭をもたげる。あー、と間延びした声を漏らして蘭は自分の股間を見下ろした。

「移動しながらは駄目？ 僕はこうなっちゃうと止まらないし」

ぼんやりとした目で股間にそそり立つペニスを見つめて

蘭はぼそぼそとした声で呟いた。

「問題ありません」

頷いた栄がベッドを降りて着替えを始める。蘭もそれに習って手早く服を身に着けた。ロビーに降りた栄が支払いを済ませて蘭のところに戻ってくる。

「学校法人吉良瀬学園の理事会によって、清陵高等学校生徒会長に対する緊急査問委員会が招集されたようです」

「……査問委員会……」

栄に促されてホテルの玄関に向かいながら蘭は眉を寄せて呟いた。ホテルマンに見送られ、ドアから外に出たところで栄が少し先に歩いてタクシーを停める。蘭は促されるままにタクシーに乗り込んだ。

「えーと……清陵センター街に行きたいんだけど」

栄が乗り込み、ドアが閉じたところで蘭は運転手に声を掛けた。すると運転手が礼儀正しい返事をして車を出す。蘭は栄の肩を自然に抱き寄せ、その手を自分の股間に導いた。身を寄せた栄がスカート越しに蘭の股間を弄り回す。ミラー越しに見た運転手がぎょっとしたような顔をする。運転手の目から見ると女同士でいちゃついているように見えるのだろう。

「校則に則った正式な招集ですが、開催日時が今夕に設定されています。多くの理事の参加が不可能な状態で開催される可能性があります」

「うーん……困ったね。裏技を使おうかな……」

呟くように言ってから蘭は栄の頭を支えて唇を合わせた。深い口づけを交わすと栄が微かに身を震わせる。

目的の場所に着いたところでタクシーは二人の客を吐き出すと、慌ただしくその場を去っていった。蘭はぼんやりとした目でそれを見送ってから、栄と一緒に歩き出した。時折、女連れと勘違いした輩が声を掛けてくる。その度に蘭はにっこりと笑ってナンパ目的の連中をさっさと追い払った。

夜は煌びやかなネオンに彩られる繁華街も、朝は静かなものだ。蘭は迷いのない足取りでとあるビルに近付いた。店舗前を掃除していた店員が困ったような顔をする。

「まだ準備中なんだけどー？ まあ……開けてあげるけどさあ……」

渋い顔をしたカラオケ屋のあの店員が仕方なさそうに二人を店内に招き入れる。いつもなら飛んでくる威勢のいい、いらっしゃいませ、の声も今はない。蘭は店員に案内されて広々とした部屋に入った。いったん、姿を消した店員がお茶を運んでくる。

「……陵の制服の写真」

店員がテーブルにお茶を置くのを待ってから、蘭はぼそりと呟いた。すると店員がぎくりと身を竦める。

「いっ、いや！ あのさ、それが、なかなか制服を着てくんなくてさ！ 撮る暇がなかったっていうかー！」

あははは、と笑った店員が頭をかく。蘭はウーロン茶の

入ったカップを見つめてから、店員に目を戻した。

「減点二」

栄が感情のない顔をしてぼそぼそと呟く。すると店員がぎくっと肩を竦めて栄を見る。

「だって、さあ、ほら、何て言うの？ オレもちょっと忙しかった……って、二人してそんな顔しないでよ、もー！」

膨れ面をした店員がどかんと向かい側のソファに腰を下ろす。蘭はうろんな目で店員を見つめてから、栄を抱えて膝に乗せた。手早くスカートをめくってペニスを露わにしたところで、栄のタイトスカートをめくってショーツをずらす。よいしょ、と言いながら蘭は栄を後ろ向きに抱えて持ち上げた。蘭の膝を跨いだ栄の膣内に一気にペニスを突っ込む。

「……それでっ！？ どーしろっての！ いちゃこいてるソコの二人！」

腕組みをしてふて腐れた顔をして店員が横を向く。蘭はどうしようかなあ、とのんびりと言いながら栄の腰をつかんで上下に揺すり始めた。

「性交処理は私の主要な業務のひとつです」

蘭にペニスが突かれながら栄が淡々と告げる。そうだよ、と頷いてから蘭は店員を見た。店員は横を向いてぎりぎり歯軋りをしてから、がばっと顔の向きを戻して二人を見る。

「だからっ！ 栄ちゃんのそのカッコだと、アヤちゃんにしか見えないんだってば！ いやもう……アンタらは……」

何故か店員が深々とため息を吐いて額を手で押さえる。蘭は眉を寄せて首を傾げた。

「え？ いろいろ違うよ。口調も体形も」

そう言いながら蘭は栄の胸に手を回し、服の上から乳房をつかんだ。

「女性化が最大限に進行したとしても、陵の胸はこんなに大きくなるからじゃないでしょう」

栄の胸の膨らみは作り物だが、手触りは最高級のものにしてあるらしい。改造が終わった後、蘭はそう説明を受けた。確かに服越しに触れた栄の乳房は柔らかく、蘭の指の動きに合わせて歪むところも良く出来ている。

「だーから、そーゆー……あー、もう……痛いって言うか、何というか……」

うなだれた店員が呻きを漏らして頭をかく。顔を上げた店員の顔からはいつものだらしない笑みは消え、やれやれ、という呆れた表情が浮かんでいた。

「アヤちゃんが女性で成人したらこんな感じ、って形にしたのはバレバレだから。大体、アヤちゃんが栄ちゃん見たら驚くでしょ？」

そんなことを言って店員が胸ポケットから珍しく煙草を

引っ張り出す。蘭は珍しい光景に少し驚いて目を見張った。これまで何度か店員とは会っているが、栄の目の前で煙草を取り出したのは初めてだ。精密機器に煙草はまずい、と言っていたのは店員ではなかっただろうか。

だが店員は煙草を口許にぶら下げただけで、火を点けようとはしない。

「陵は気付いてなかったみたいだけど」

「アヤちゃんは気付かなくても、他のコが気付くっしょ？  
もうちょっと気を遣うとかさあ」

そこまで言ってから店員が嫌そうに顔をしかめて、無理か、と呟くように言う。蘭は栄の首筋に顔を埋め、乳房をつかむ手に力をこめた。ペニスを挿入され、乳房を刺激されても、今の栄はそれらしい反応は見せない。性感センサーを有効にしなければ平静でいられることも、機械仕掛けの身体の良いところだと、蘭は改めて思った。そのおかげでこんな風にしていてもごく普通に話が続けられる。

「それともワザと？ 嫌がらせとか？」

蘭が返答しないことをどう思ったのか、店員がそんなことを訊く。まさか、と苦笑して蘭は顔を上げた。

「どうして？ そんなことする意味、ないと思うけど」

「これだからなあ……。アヤちゃんが嫌がって逃げるのも判るっていうかー。ま、いっけど」

店員が喋るたびに口許にぶら下がった煙草が揺れる。蘭は何となくその動きを目で追った。すると店員がため息を

吐いてソファに寄りかかり、腕を背もたれに伸ばして横を向く。

「どーでもいいけど、そおゆうことは、出来ればココではやめて欲しいんだけど？ 何のためにホテルが併設されてると思ってんの？」

どうでもいい、という割には店員は渋面で、嫌そうにしているのは蘭にも判った。えー、と口の中で反発してから、蘭は栄のショーツを引き下ろした。それに合わせて栄が膝を抱えるようにして両足を揃える。するするとストッキングの上を滑ったショーツが栄の足元に落ちる。

「ちょっ、ココで続けるつもり！？ 誰が掃除すると思って」

悲鳴じみた声を上げた店員の言葉を遮るように栄が口を開く。

「そろそろ開店の準備を始めなければ開店時刻に間に合わないおそれがあると思われませんが……」

「うあっ。忘れてたっ。……って、結局、何の用事！？」

栄の指摘を受けた店員が尖った声で言う。蘭はうーん、と間延びした声で言ってからにっこりと笑った。

「査問委員会が招集されるんだって」

「……うっ。もしかして蘭ちゃん、まさかオレに小間使いのように働けとか……？」

うろんな目をしながら店員がのろのろと立ち上がる。オレはしががないカラオケ屋の店員でしょー！ と店員がヒス

テリックに叫ぶ。蘭はぼんやりとした目で店員を見上げた。

「査問委員会に参加すべきメンバーの多くが、参加要請を知った時点で、既に査問委員会が終了しているといった事態が予測されます」

蘭に身を揺すられながら栄が淡々とした声で言う。すると店員が深々とため息を吐いた。

「おーらいりょーかい、判ったよ。でもあんまり期待、しないでよねっ！」

ふて腐れた顔で言った店員が慌ただしい足取りで部屋を出て行く。のんびりとそれを見送ってから、蘭は栄を胸に抱え込んだ。

「……それとも陵の写真を頼んだ方が良かったかな」

店員が出て行ったドアを見つめて蘭はぼそりと呟いた。

～立ち読み版はここまでです～